

2011「富士川町観光物産協会フォトコンテスト」審査結果
審査：清水哲朗（公益社団法人日本写真家協会会員）

（敬称略）

<富士川町観光物産協会会長賞>

相川 悟「朝光の月」

<富士山賞>

中川美治「芽吹き頃」

<季節賞（春）>

笠井 桂「やよいの空」

<季節賞（夏）>

奇特久義「梅雨のアジサイ寺」

<季節賞（秋）>

岩崎康治「観音滝」

<季節賞（冬）>

河西祐司「雲海光明」

<入選>

岡本芳隆 「色付く落葉松の向うに」

渡辺 勝 「ゆずの里に舞う」

小高武夫 「快晴おまつり広場」

内藤 均 「銀夜」

中川美治 「青田爽やか」

●講評

<富士川町観光物産協会賞>

相川悟「朝光の月」

富士山頂に輝く三日月。幻想的な美しさを後押ししているのが地球照。ダイヤモンド富士を撮影できる富士川町では太陽と同じ動きをする月も同様の位置で捉えることができる。地球照は空気の澄む秋から冬にかけて観察しやすいが、シンプルな画面構成でシーンとしての美しさを追求した作者のセンスは鋭く冷静である。シャッタータイミングへのこだわりも隙がなく、この作品の前ではあたかも現場で見ているような錯覚を起こさせてくれる。

<富士山賞>

中川美治「芽吹きの際」

息をのむほどの美しい光景。どれほどの感動を作者は味わったのだろうか。芽吹きの際の樹を手前に大きく捉えながらも優美な富士の印象はしっかりと伝えている。これができるのでできない。頭の中に完璧なまでのイメージがなければ逆に風景に撮らされてしまう。被写体としての富士山がまさにそう。作者は見事対峙し、自分の印象を明確に伝えている。

<季節賞（春）>

笠井桂「やよいの空」

「富士には月見草が良く似合ふ」とは太宰の言葉だが、いやいや桜だって負けてはいない。富士も桜も日本を代表する存在。その組み合わせに日本人も外国人も喜ぶだろう。青空にちょこんと雲が浮かんでいる姿がかわいらしく、作者の愛嬌ぶりがそこに反映されている。

<季節賞（夏）>

奇特久義「梅雨のアジサイ寺」

初夏には2万本のアジサイが咲く徳栄山妙法寺。やや俯瞰気味の位置のポジションを選んだことで、美しさを競うように咲いているアジサイの向こうに本堂がどっしりと構えている姿を巧みに描写している。梅雨時の撮影だけに、欲を言えば雨降りの日が望ましかった。

<季節賞（秋）>

岩崎康治「観音滝」

大柳川渓谷。周囲を秋色に彩られた観音滝を活写。滝の撮影というと1/2秒前後のシャッター速度選択が定番だが、あえてそれ以上の速度を選んだことで、躍動感を見事に表現している。美しい紅葉にも惑わされず、独自の世界観で滝を表現した芯の強さも興味深い。

<季節賞（冬）>

河西祐司「雲海光明」

ダイヤモンド富士を撮るためにどれほどの人が富士川町へ訪れるのか。水平線から昇る太陽とは違い、山頂に輝く太陽は露出選択が難しい。太陽に合わせると周囲は暗くなり周囲を見せようとするすると太陽が白く飛ぶ。事象でなく風景として魅せた作者の技量は実に高い。

（総評）

撮影地をひとつの町内に限定してフォトコンテストを行うという試みが面白い。イベントや風景、祭りなど、よほどの自信がある町でなければできないものだ。しかし、蓋を開けてみるとどうだろう。魅力的なシーンが次々とでてくるわ、でてくるわ。フォトコンテストを企画した富士川町観光物産協会の自信は確かに嘘偽りでも背伸びをしたものでもなかった。富士川町のありのままの姿を写せばよいだけである。写真は応募者の技量もそうだが、被写体の良し悪しに依存する部分も大きい。それを作者自身が被写体にふさわしい季節、時間、場所、光、シャッタータイミングを選び、さらに魅力的に作画していかなければならない。今回入選入賞した作品はどのシーンも県内外の人が羨ましく思えるほどに富士川町の魅力を伝えてくれた。審査基準はテーマとして掲げられていた「富士川町の四季」「富士川町内から撮影した富士山」をベースに、作者が富士川町の何を伝えたいのかによって判断させてもらった。自己表現でありながらも、しっかりと富士川町の魅力を伝えられるかどうか。今回これだけレベルの高い作品が集まったが、惜しくも選外となってしまった応募作品の中にも富士川町の魅力がたくさん詰まっていた。今後も富士山の素晴らしさだけでなく、富士川町のどのような魅力を伝えたいのか、季節感や文化風習、そこに住まう人々を交えて表現できる人が高く評価されるフォトコンテストとなるだろう。